

1. はじめに

明治期に日本に滞在したドイツ人の中で、もっとも印象的かつ日本に影響を与えた一人にエルヴィン・フォン・ベルツがあげられよう。今日に至るまで多くの書物が彼を「日本近代医学の父」と称してきた¹。しかし彼の活動領域は医学だけに止まらず、人類学者、民俗学者、日本学者あるいは美術品収集家としても名を上げた。ベルツの温泉に関する研究と彼の顕彰は、1962年には南ドイツの生地ビーティヒハイムと群馬県草津温泉を姉妹都市に結びつけた²。さらにベルツは日本の体育・スポーツ、また特に日本の伝統的武術に関連する活動にも従事したのだが、今日これについては比較的知られていない。

ベルツについての文献によると、ベルツは海水浴のパイオニアであり水泳の推奨者でもあったが³、とりわけ彼は日本の伝統的な武術を支持し、これを推進した⁴。中には武術の再興にはベルツの影響があり⁵、その普及には彼の功労があるとする著者も見られる⁶。酒井シヅは、ドイツ語増補版『ベルツの日記』1979年版の日本語訳⁷に序を寄せて、ベルツは「…とくに柔術については、維新後ほとんど忘れかけた状態にあったものを国民的スポーツになるまで育て上げた」と

¹ 例えば、SCHOTTLAENDER, 1928, p. 59. 山上編(1939)、序文1頁。武見太郎による序文、小川(1969)、1頁所収。酒井シヅによる序文、菅沼訳(1979)(上)、3頁所収。市川(1981)、序文1頁。荒俣(1991)、66頁。安井(1995)、1頁、または頼住(2000a)、1頁、ほか参照。

² ベルツは草津を治療効果の高い温泉と見なし、一大温泉地として発展させたかったが、当時は出資者が見つからず、実現できなかった(KLEINSCHMIDT, 1992, p. 34 及び p. 54、ヴェスコヴィ(2001)、112頁、GERMANN, 2006, pp. 58-59を参照)。また市川は次のように述べている。「草津の一部に『外国人に温泉を使用させる事はどうか』と、ベルツ先生の計画に反対意見が出てもめた」(市川(1981)、79頁)。ベルツと温泉については、例えば三沢、日本新薬編(1966)、26-34頁所収、または市川(1981)を参照。

³ 例えば、酒井、菅沼訳(1979)(上)、16頁。荒俣(1991)、69頁。ヴェスコヴィ(2001)、61頁。頼住、大道・頼住(2003)、107頁を参照。しかし明治期における海水浴は、主に保養のため、または海水効果による病氣治癒の補助策とされた。運動のためというのは二次的であったと考えられる。

⁴ 例えば、木村(1964b)、704-705頁。酒井、菅沼訳(1979)(上)16頁、または頼住(2002)、1-2頁等を参照。

⁵ 例えば、SCHOTTLAENDER, 1928, p. 58. MÖLLER, 1990, p. 133. クラース・比企編(1992)、95頁。ヴェスコヴィ(2001)、60-61頁を参照。

⁶ 荒俣(1991)、69頁及び酒井、菅沼訳(1979)(上)、16頁。

⁷ これは1931年のドイツ版を指している。息子のエルヴィン・トク・ベルツが1930年版『ベルツの日記』と1931年に長編版を編集したので、『ベルツの日記』の二版が存在する(GERMANN, 2006, pp. 11ff. を参照)。これらの二版はベルツの1905年までの日本滞在期間を網羅している。今日に至るまで岩波文庫に収録されている菅沼による『ベルツの日記』訳がもっとも知られているが、これも完全なドイツ版の翻訳ではない。例えば、「Aus dem Vorwort zu Kano 'Jiu-Jitsu」(嘉納氏著「柔術」の序文より)が欠落している(BÄLZ, 1930, pp. 66-68 及び 1931, pp. 89-91 と菅沼訳(1951)(上)、及び菅沼訳(1979)(上)、と比較のこと)。同様に浜辺訳(1939)にも欠落しているが、山上編(1939)による日記の翻訳抄本には掲載されている。

すら書いており⁸、類似のベルツ評価は柔道・柔術の歴史を扱うドイツ国内の多数のインターネットサイトにも見受けられる。

これらの記述に共通しているのは、ベルツが日本の身体修練、そして特に伝統的な武術の近代的発展に強くかつ大きく影響を及ぼしたとする点である。しかしこれについては少なくとも日本における研究以外では、ごくわずかの言及がなされているのみである。また現在の研究状況を見ると、ベルツの果たした役割とその重みは必ずしも明確に評価されているわけではない。

これまでに西洋でなされたベルツ研究のうち学術的な入門概説としては、メーラー (Möller) の論文「ベルツと日本の身体文化やスポーツの発展について」(1990)が挙げられる。またクラーク (Clark) は「ベルツと日本武術の再興」を2003年の著書中の一章分に当てているが、日本の文献への言及は見当たらない。一方、日本にはベルツと日本体育ないしはベルツと伝統的武術を主題にする研究論文が多数存在する。その一部は西洋のものに比べて内容的により詳細であり、西洋ではほとんど取り上げられていないかまたは考慮されていない観点をも扱っている。一例を挙げると、日本の文部省が1883年に嘱託実施した学校における「剣術柔術等教育上利害適否調査」がある。この調査結果は当時大きな反響を呼んだものであるが、ベルツもその調査員として加わっていた。さらにベルツを取り上げている日本での研究中注目すべきものとしては、参考文献にも示したように、木村吉次、頼住一昭、稲垣正浩、大道等（一部頼住と共著）、村田直樹の研究が挙げられる。

これまで西洋における体育と武術に関するベルツ研究では、ベルツ自身による一次資料の紹介はごくわずかであると言わざるを得ない。それに比べると日本ではもう少し幅広い紹介がなされている。しかし、日本においてさえも、ベルツによるドイツ語・英語・日本語の著作を十分に検討、網羅しまとめた書物は見当たらない。本書では読者に、日本だけに止まらず西洋にまで及ぶベルツの体育、そして彼の日本伝統武術に関する意見、分析、奨励について、従来より幅広く紹介する。

また、ベルツが日本の体育、とりわけ伝統的武術にどのような影響を及ぼしたかについても考察する。その際、歴史的コンテクストに着目しながら、現存する資料を調べて行く。言うまでもなく、これらの作業は既存の研究を踏まえつつ、その中で言及されているいくつかの説についても検証する。

本書では、資料として、ベルツが発表した著述及び日記の記述を用いる。日記の類には、ドイツ語圏では未発表の1905年以降の日記も含まれる。さらに、ドイツあるいは日本で未発表、ないしは双方で未発表のベルツによる講演のための手書き原稿、タイプ原稿、そしてこれまでの研究が全く取り扱ってこなかつ

⁸ 酒井、菅沼訳(1979)(上)、16頁。類似した評価はSCHOTTLAENDER, 1928, p. 58にも見られる。

た文献資料についても分析する。さらに、これら一次文献資料に加えて、本書では、明治期におけるベルツに関する新聞記事などの二次文献資料も紹介していく。本書で扱う資料のいくつかは、筆者により初めてドイツ語あるいは日本語に翻訳されるものである。